

再び攝大乘論と大乘阿毗達磨經

とについて

宇井伯壽

會て宗教研究誌上に於て攝大乘論と大乘阿毗達磨經との關係について論述したが、爾來此問題について一層詳しい考察をなす必要に迫られたのでこゝに之を再論せむとするのである。種々に材料を考察した結果、或点に關しては前の所論と異なる意見も出てゐるが、然し大体からいへば、全く再論に過ぎないものである。

攝大乘論は既に唯識系統の經論の現れた後に於てこれ等を總括し以て全体としての學說を組織した論であるから、其叙述の中途に於て數々種々なる經論を引用して居る。従つて此等の經論を研究することは攝大乘論の内容學說の淵源系統等を明にする上に於て欠くべからざることである。此中に於て先づ大乘阿毗達磨經との關係について考察することにする。

和漢に於ては古くから攝大乘論は大乘阿毗達磨經攝大乘品を釋したものであるというて居る。この説は果して何時からいはるゝことになつたかを考へて見るに、佛陀扇多の攝大乘論には卷頭に、「大乘阿毗曇經の中、如來に對する前にて大乘の義を顯發せむと欲するが爲めの故に、善住の菩薩は説く、謂ふ所は、大乘經に依りて諸佛如來に十種の勝妙と勝語と有ることを明す」とあるのみで、卷尾には他譯の如くに大乘阿毗達磨經に關することが附加せられて居ないから

右の卷頭の文のみからは此論が此經の攝大乘品を釋したものとなす説の起る所以はあり得ないと考へらるる。勿論此文以外に他に特別にかかる説を傳へたといはれて居ることもない。故に北魏時代にかかる説があつたとは推定するを得ない。然らば眞諦の譯出の時は如何であるか。今試に眞諦譯以下の三譯の卷尾の附言を列擧すれば、

(眞) 阿毗達磨大乘藏經中名攝大乘、此正說究竟。

(達) 阿毗達磨大乘修多羅中攝大乘品解釋竟、阿闍梨阿僧伽造。

(玄) 阿毗達磨大乘經中攝大乘品我阿僧伽略釋究竟。

であつて、此中眞諦譯のものは攝大乘論が大乘阿毗達磨經の釋論なることを示してゐないし、又攝大乘は大乘阿毗達磨經の一品の名であるともなして居ない。故に攝大乘論の攝大乘を解釋するにも大乘阿毗達磨經の攝大乘品を釋した爲の名であるとなすことがあつたとは考へられぬ。勿論攝論宗の典籍が全く散逸して傳はらぬから、確實な斷定は出來ないが、然し現行眞諦譯攝大乘論釋に存する道基の序の中に

言攝大乘者、攝謂能攝、蘊積苞含攝藏名攝、言大乘者理必絕待、假大稱之名曰大乘、其義郭周体性

該博、謂爲大也、所行功德能至能證、名之爲乘。

とあつて、單に大乘至極の理を攝藏する意味にのみ見、大乘阿毗達磨經との關係などには觸れて居らぬ。道基は彭城の靖(靜)嵩の弟子であつて、攝論宗の有數の學者であるから、之によつても眞諦系統の攝論宗に於ては攝大乘論が大乘阿毗達磨經攝大乘品を釋したものとはいはなかつたと考へらるる。大正大藏經第八十五卷古逸部に存する攝大乘論抄にも攝大乘論の題目を釋して、攝とは一以文攝文、二以義攝義、三以義攝文、四以文攝義の四種であるとして實例

の文を列舉し、第四について。

即此攝大乘論文是也、論文雖簡略、總攝諸部大乘所詮之義、爲十種勝相聚、此文下此即以文攝義故名攝也

といひ、又大をば体相用の三種となし、起信論の三大の意味に解釋し、乘は一理乘、二行乘、三果乘の三種とし、一は初二勝相、自性住佛性、二は中六勝相、引出佛性、三は後二勝相、至德果佛性となして佛性論の三佛性を當て、論を難論と集義論と釋宗論と釋文論となして解釋し、以て諸部大乘所詮義を總攝するの意となし、大乘阿毗達磨經との關係を暗示すらなさいし、又攝大乘論章卷第一にも十勝相について

問、此十相爲在二一經所說、爲在多經共說。釋有二義、一依論初似在一一經所說、故無等聖教章云、佛世尊前善入二句義、菩薩摩訶薩、乃至說如是言、諸佛世尊有二十勝相、過餘教等、下重開列二十名、廣辨二

其相、故似在一一經所說。驗下廣文似在多經、故衆名章下廣引多經多論證成十義。何故如此推驗、

二文應在三阿毗達磨藏中略辨二十義、此即無等聖教章及十義次第章所論者是。於餘經餘論廣辨二十義、

此即衆名章下乃至論末所辨者即是。以下其略文中於一一經所說、故初二章依略經辨、廣文散在多經論

故衆名章下依別經別論廣釋其義、以有斯趣故廣略不同、此義深懸、理宜推究耳。

というて、明に大乘阿毗達磨經にのみ依るのでなく、むしろ其中の略辨によつて略釋し、廣釋は多經論に依るとなし、何等攝大乘品の釋なることを知つて居つたことを示さない。此の如く眞諦譯のときには猶未だいはれなかつたことである。然るに隋の達摩笈多譯になると明確に大乘阿毗達磨經の攝大乘品を略釋して攝大乘論が出来たとすから、これが

支那に於て此事を初めて傳へたものであると思はる。之を更に印度に還して考へて見ると、眞諦以後達摩笈多以前に初めてかくいはるるに至つたと見るべく、それ以前にあつたとはいへない説であることになる。無性釋の本文にも卷尾にも存するが、無性釋もこれ以前に出來たものとは考へられないから、何等矛盾を來さない。然らば又大乘阿毗達磨經に攝大乘品なる一品があつたといふことも到底直に之を眞なりと信用し得られない。恐らく當時は大乘阿毗達磨經を實際に見たのではなからうと考へらるる。更に支那としては玄奘の歸朝翻譯以來慈恩が傳へて大乘法苑義林章總料簡の中六合釋を解釋する間に持業釋の實例として無性の攝大乘論釋を引用して攝大乘品の釋でないとなす説を出し

攝大乘論亦復如是、許能攝教即是論故、故無性云、「是故說此名攝大乘盡其所有大乘綱要無別

說故」此以本經名大乘、末論名爲攝、非以下本經攝大乘品名攝大乘也

というて、攝大乘論が大乘阿毗達磨經攝大乘品を釋したものとなす説をも明示し、此外にも明に攝大乘論が大乘阿毗達磨經を釋したものなることを述べて居るから、此系統で盛に唱へられ、以後和漢に於て流布するに至つたのであるし、實際上殆んど此説のみが行はれて、他方の本經の攝大乘品を以て攝大乘と名づくるにはあらずして大乘の所有の綱要を攝する意味で名づけられて居るとなす説は忘られた如き状態である。然し此兩説を更に少しく吟味することによつて大乘阿毗達磨經なるものと攝大乘論との關係を明にすべきである。

順序として大乘阿毗達磨經とは如何なるものなるかを研究せねばならぬ。阿毗達磨 (abhidharma) はいふまでもなく經律論三藏の中の論と譯せらるる梵語の音譯であるから、論經といふ名稱は三藏の區分からいへば頗る奇なるものであつて明に三藏の區分を沒却して居る。勿論古い時代に遡れば三藏の區分はなくして法律二藏が存したのみであつて、こ

の法が經論二藏となつたについて何處に其根本的區別が認めらるるかの問題に入れば、そこには種々なる難問題も含まれて居ると考へらるるが、然し大乘阿毗達磨經の現はるるよりも遙に以前に既に三藏の區別は一般に用ひられて居つたのであるし、三藏各の一般的特質すら明にせられて居たのであるから、かかる時期に於てこの區分に背いて之を無視するのは如何にも奇矯に失するものである。然らば何故に殊更にかかる奇矯と見ゆる題名を附した經を出すに至つたかといへば、恐らく此經の内容に由來すと見るべきであらう。元來阿毗達磨は所謂小乘に屬すとせらるるものに於て見れば、古くは無比法と譯し新しくは對法と譯すにも表はるる如く、内容一般は思索的解釋的又は組織的論述的のものであつて經と稱せらるるものとは著しく異なる性質を現して居る。經は大体は物語的記述的又は直觀的包容的であつて、組織的解釋を待つてゐるものである。故に直接又は間接に之に基いて論が作らるるといはるのであるが、然し大乘に屬すとせらるる論を見れば、小乘論藏の如きものは殆どなくして凡てそれぞれの論師の獨立完全な典型的の著述である。小乘論藏に於いて後世のものは之と異らないものであるが古い小乘論藏に相對比すべき大乘論藏は殆んど見出されない。この一種の缺陷を補うて或時期に大乘の方面に於て阿毗達磨的のものを内容とする經が現はるるに至つたと考へらるる。實例としても、有名なものとしては無上依經解深密經佛地經等の如き、其著しいものである。これ等の經はそれぞれの内容に應じて各の經名を有するも、他方よりいへば此等を凡て論經即ち阿毗達磨經と稱しても差支のない如きものである。かかる傾向の産物の一が今いふ大乘阿毗達磨經であつて、これに於ては遂に一般的に大乘論經とまで自稱するに至つたのである。これ等の經が論藏的であるとすが決して見當違ひでないことは大法苑義林章諸藏章の中に印度の一説として華嚴般若經、阿毗達磨經深密經は論、毗奈耶瞿沙經は律となす説のあることを傳へて居るのでも判る。そし

てこれ等の經の題名其他の命名は極めて拙劣で而も機械的であるが、大乘阿毗達磨經の名も確にその一なるを拒むを得まい。解深密經には如理請問菩薩（善問菩薩）などといふ菩薩名が現はるるが、如何にも一種驟經としての論經的氣分が漂うて居ると思はるる。然し大乘阿毗達磨經は數々阿毗達磨大乘經とも呼ばれて居つて、そこには何等か異つた解釋も容れられ得るかの如くである。各譯が引用する際其名を擧ぐるのを見ると下の如くである。

佛陀扇多譯

眞諦譯

達摩笈多譯

玄奘譯

(1) 大乘阿毗曇經

(阿毘達磨大乘修多羅)

阿毗達磨大乘修多羅

阿毗達磨大乘經

(2) 同右

阿毗達磨略本

阿毗達磨經

同右

(3) (此中)

阿毗達磨

(彼經)

(彼經)

(4) 大乘阿毗曇修多羅

大乘阿毗達磨

阿毗達磨修多羅

阿毗達磨大乘經

(5) 阿毗曇

阿毗達磨修多羅

阿毗達磨經

同右

(6) (欠)

阿毗達磨大乘藏經

阿毗達磨大乘修多羅

同右

(1)は卷頭、(6)は卷尾にあるもので、中間は本文中の引用の場合である。之によると、眞諦譯を暫く別として、大乘阿毗達磨經と阿毗達磨大乘經と阿毗達磨經と阿毗達磨との四種に呼ばれて居るが、最後の二種は略稱であり、而も阿毗達磨經の方は通稱であること、梵文の唯識三十頌安慧釋にも此名で一偈が引用せられて居る点からも判る。そして具には大乘阿毗達磨經又は阿毗達磨大乘經と稱せられるのであるが阿毗達磨大乘經は恐らく阿毗達磨と名づくる大乘經 (Abhidharma-nāma-mahāyānasūtra) を殆ど其ま譯したものであるし、之を漢譯としては又大乘阿毗達磨經となすに外な

らぬのであらうと思はるる。解深密經が大乗成業論には解深密大乘經(Saṃdhiṃirmocana-nama-mahāyānasūtra)とあるのも之と全く同様である。玄奘は攝大乘論に於ては常に阿毗達磨大乘經とのみならず、同一偈を引用する成唯識論に於ては大乗阿毗達磨契經となし、大乗阿毗達磨集論同雜集論に於ても大乗阿毗達磨經となして居る。故に兩名の間には何等意味上の相違があるのではないと見ねばならぬ。即ち阿毗達磨といふのが此經の固有名たるものである。此点から更に眞諦譯のものを考へると、阿毗達磨略本の略本は、如何にも廣本に對する名であり従つて此經に略本と廣本とがあつたかの如く見せしむる点があつても、實際は決してさうではなくして、唯單に修多羅(sūtra)の譯に過ぎないものであるに相違ないと思はるる。他の三譯が其同じ箇所に於て阿毗達磨經又は大乗阿毗曇經或は阿毗達磨大乘經と稱し、何等略本など存在を示す点がないのみならず、修多羅は本來略詮の意味であるから、眞諦はここに其意味を以て譯出したのであると見らるるが爲めである。現に安慧が此同一偈を唯識三十頌釋の中に引用して阿毗達磨經のものとなし、明確に經(sūtra)となして居る。故に此点には何等の疑もない。更に眞諦譯の卷尾に阿毗達磨大乘藏經とあるのは、阿毗達磨なる名稱は一般的にいへば小乗論藏の名であるから、或は必ずしも然らずとなすも、ともかく大小乘に共通であるから、小乗藏を簡び論藏を簡むで大乘藏經となしたのであらう。然し又阿毗達磨大乘藏經は大乗阿毗達磨藏經でもある理であるから、阿毗達磨は阿毗達磨藏即ち論藏の名なることを示し、それが經の内容となつて居ることを表すものでもある。眞諦譯の世親釋の部には大乗阿毗達磨を時には經名と見ずに大乘論藏と解して居る所もある。此の如き大乗阿毗達磨經は如何なる内容を有するものであるか。此經は未だ曾て漢譯せられたこともなく原梵文も存せず又西藏譯もないから、内容の如何を知悉することは不可能である。我國の學者は七百卷から成つて居つたなどとい

ふが、恐らく單なる想像であつて何等基く所はないものであらう。七百卷程の大部の經は多數存するのではなく、又存するとすれば叢書のもので、従つて其部分譯があるのが通例であるに、此の如きものの存在は未だ曾ていはれたことがない。或は大乗論全体を豫想しての想像などかも知れぬ。然し大乘阿毗達磨經なるものが曾ては存在したことは事實であつて疑はない。唯識説を述ぶる論書中には數々其中の偈文散文が引用せられて居る。今其著しいものを擧げて見よう。(2)等の數字は前表の經名を擧ぐるについて附したものである。

(一)(2)此界無始時 一切法依止。若有諸道有、及有得涅槃。 (眞諦譯攝大乘論應知依止勝相品第一)

(二)(3)諸法依藏住 一切種子藏、故名阿黎耶。我爲勝人説。 (同上、同品)

(三)(4)諸法於識藏、識於法亦爾、此二互爲因 亦恒互爲果。 (同上、同品)

(四)如佛世尊説、若菩薩與四法相應、能尋能入一切識無塵。何者爲四。一知相違識相、譬如下餓鬼畜生人天於同境界、由見識有異。二由見下無境界識上、譬如於過去未來夢影塵中。三由知下離功用無顛倒應上成、譬如實有塵中緣塵起識不成顛倒、不中功用如實知故。四由知義隨順三慧。云何如此。一切聖人入觀得心自在、由願樂自在故、如願樂塵種種顯現故、若觀行人已得奢摩他、修法觀加行隨唯思惟義顯現故、若人得無分別智未出無分別觀、一切塵不顯現故。

(五) 復說「別偈」

餓鬼畜生人	諸天等如「應	一境心異故	許「彼境界成」。
於「過去未來」	於「夢」影中「	智緣「非有境」	此無轉成「境」。
若塵成爲「境	無「無分別智」、	若此無佛果	應「得無」是處」。
得「自在」菩薩	由「願樂力」故	如意地等成	得定人亦爾。
成「就簡擇」人	有智得「定人	於「內思」諸法「	如「義顯現」故。
無分別修時	諸義不「顯現」、	應「知無」有塵	由「此故無」識。

(同上、應知勝相品第二。唯識述記による)

(同上、依慧學勝相品第八應知勝相品第三。唯識述記及び義林章による)

(六) (5) 佛世尊說、法有「三種」。一染污分、二清淨分、三染污清淨分。「依「何義」說「此三分」」。於「依他性中」、分別性爲「染污分」、真實性爲「清淨分」、依他性爲「染污清淨分」。「依「如「此義」故說三分。於「此義中」以「何爲」譬。以「金藏土」爲「譬」。譬如「於「金藏土中」見上」有「三法」。一地界、二金、三土。於「地界中」、土非「有而顯現」、金實有「不」顯現」。此土若以「火燒鍊」、土則不「現」、金相自現、此地界土顯現時、由「虛妄相」顯現、金顯現時、由「真實相」顯現。是故地界有「三分」。如「此本識未下爲「無分別智火」所中燒鍊上時、此識由「虛妄分別性」顯現、不下由「真實性」顯現上、若爲「無分別智火」所中燒鍊上時此識由「成就真實性」顯現、不下由「虛妄分別性」顯現上、是故虛妄分別性識即依他性有「二分」、譬如「金藏土中所」有地界」。

(同上、應知勝相品第二)

(七) 如薄伽梵於大乘阿毗達磨經中說如是言、若諸菩薩欲勤精進修諸善品、欲行眞實法隨法行、欲善攝益一切有情、欲得速證阿耨多羅三藐三菩提者、當正觀察十二處法、不應與他共興諍論。何等十二。一者宣說證無上義微妙法時、其信解者甚爲難得。二者作受教心而請問者甚爲難得。三者時衆賢善觀察德失甚爲難得。四者凡所興論能離六失甚爲難得。何等爲六。謂執着邪宗失、矯亂語失所作語言不應時失、言退屈失、塵惡語失、心恚怒失。五者凡興論時不懷癩毒甚爲難得。六者凡興論時善護他心甚爲難得。七者凡興論時善護定心甚爲難得。八者凡興論時欲令已劣他得勝心甚爲難得。九者已劣他勝心不煩惱甚爲難得。十者心已煩惱得安穩住甚爲難得。十一者既不安住常修善法甚爲難得。十二者於諸善法既不恒修心未得定能速得定心得定能速解脫甚爲難得。

(大乘阿毗達磨集論第七、同雜集論第十六)

(八) 無有下眼等識 不緣實境起上 意識有二種 緣實不實境

(唯識二十論述記二十二左)

(九) 如是染汚意 是識之所依 此意未滅時 識縛終不脫

(攝大乘論無性釋第一、成唯識論第五、述記第五末、但不明確)

目下としては右のものを見出し得る。此外にも勿論あるであらうが、寡聞の爲に逸して居る。此中にて(一)は究竟一乘實性論の如きにも存し、現今は梵文も知られ、唯識三十頌の安慧釋の中に、薄伽梵によりて阿毗達磨經に於ていはれ

たとして引用せられて居る。

Uktam hi Bhagavatā-Abhidharmasūtre-

anādikāliko dhātuh sarvadharmasamāśrayah /

tasmim sati gatih sarvanirvāṇādhigamo 'pi vā //

(Sylvain Lévi's edition, p.37)

梵文から見ると漢譯は殆ど間然する所がない。何れの漢譯も第四句に及の字が用ひられ、梵文には或の字が存するが爲に一見適切でないが如くであるが、然し梵文は直前の字と共に見て、及と譯すも其意味はよく傳へらるる。更に(三)も安慧の中邊分別論の註の中に梵文が存する。

Yathoktam abhidharmasūtragāthāyāni-

sarvadharmā hi ajinā vijñāno teṣu tat tathā /

anyonyaphalabhāvena hetubhāvena sarvadā //

(大谷學報十二・二, p.104; Calcutta Oriental Series, No. 24, p.28)

梵文後半は果を先に、因を後にいひ、佛陀扇多譯玄奘譯之に従ひ、眞諦譯達磨笈多譯は因を先に、果を後となすが、恐らく各の語の習慣に従つたものであらう。單に二偈であるが、之によつて經名も知られ、又(二)も(五)も其他もシュローカであつたことが知らるる。(二)は未だ梵文を見ないが、三偈とも成唯識論にも存し、唯識說特に阿賴耶識緣起の綱格を示すものとして常に重要視せらるるものである。此中、(二)について考へ見るに、識について解深密經

は身分生起の最初を見て阿陀那 (ādāna) 識即ち執持識の名を主とし、之を或は阿頼耶 (ālaya) 識即ち阿黎耶識、譯して藏識とも心 (citta 質多) ともなすと説くから、此識を直に阿黎耶と指名したのは大乘阿毗達磨經が最初かとも推定せらるるのである。然らば唯識説一般が解深密經にも基きながら却つて阿黎耶識の名を用ふることが通常であるのはこの大乘阿毗達磨經に従つて居るものであるといへる。そして又攝大乘論に於る(一)(二)の二偈の引用は阿黎耶識の識体と名稱とが佛によりて説かれたことを明す聖教量としてであるから、根本的に最重要なものである。更に又(三)はこの(二)の前半と共に又は獨立にも阿頼耶識縁起の中心たる種子生現行現行熏種子の考即ち阿黎耶識と諸法とが互爲因果の關係なるを阿黎耶識と受用識との間に於て説くとなすものであつて、唯識説としては、成唯識論の如き立場を取るならば勿論のこと、攝大乘論の如き立場を取るとしても一應は必ず、この解釋をなさねば其説を成立せしむることを得ないものである。此点に關する聖教量として引用せられて居るのである。此の如くにして以上の三頌は縁起門の唯識を説く基礎的のものなることが知らるる。更に(四)は玄奘譯を成唯識論の譯語で擧ぐれば、一相違識相智、二無所緣識智、三自應無倒智、四隨三智轉智、一隨自在者智轉智、二隨觀察者智轉智、三隨無分別智轉智であつて、所謂四智三慧である。此四智の中第一第二は唯識二十論の要領をなす理論的のもの、第三は實踐的方面より唯識義を立て同時に迷界存在の所以を解釋するもの、第四は影像門の唯識を指して居るものであつて、何れも唯識無境の説の根本を述べたものである。攝大乘論は經名を出さないが、唯識無塵の聖教量となすのである。又(五)は攝大乘論としては(四)とは別處に掲げられて居るが、眞諦譯は明に此中有六偈、重顯前義、此偈後依智學中當廣分別說、謂餓鬼畜生人如是等とあり、達摩笈多譯にも此意味の文があつて、(四)を總括する重說の偈なるを示して居る。六偈は全く四智三慧に該當

することは一見して明である。攝大乘論としては此六偈は無分別智を成立する爲めの聖教量とせられて居るのであるから、無分別智の重要なだけそれだけこの六偈が重要視せられて居るのである。(六)については何れの部分が經文で、何れの部分が論主の附加的解釋文か明確に區別するを得ぬが、ともかく此全体の文が其まま經文のみであるとは考へられぬ。此点は此文の直前に婆羅門問經を引用し、又直後に諸經の文を擧げて居るのと比較してしか考へらるのであるから、試に論主の筆と思はるる文を、前半に於て、括弧内に入れて見たが、後半については如何とも判定するを得ぬ。勿論全体が此まま經文の引用と見做しても差支ないであらうし、又區別的に見るとなすも、この趣意を考へると、これ明に三性門の唯識を説いたものといふべきで、唯識説の歴史的變遷上重要な意義を有する。三性門の唯識なる成語が會て用ひられたことがあるかどうか明確でないが、緣起門の唯識と影像門の唯識との二語は德龍の解深密經講讚の中に既に用ひられて居るから、これと相對し相區別して且く三性門の唯識の語を用ふる。これは依他性分別性眞實性の三性によつて唯識無塵を説くものであつて攝大乘論は緣起影像二門の唯識と同等又はそれ以上に重要視して居るが、これが明に大乘阿毗達磨經に基くこと此(六)によつて明知せらるるのである。後世護法の唯識説に於ては三性に對する解釋が攝大乘論の説とは異なるから、従つて三性門の唯識を重要視しないことになつた如くであるが、これは一方に於ては學説の變遷であり、同時に他方に於ては其基く源泉を異にすることを示すものである。護法の成唯識論は解深密經瑜伽師地論を其基く主なる源泉となし又攝大乘論は特に無性釋に系統を引いて居るから、三性門の唯識を重むじないのであるが、三性門の唯識は大乘莊嚴經論中邊分別論から無着の攝大乘論並に其世親釋に來て居るものといふべく、それが經としては大乗阿毗達磨經に存するのである。以て此經の重要なことが判るであらう。次に(七)は大乗阿毗達磨集論に於

て論軌決擇として瑜伽師地論の説く七因明の定義枚擧だけを述べた後に、若し自ら利益安樂を求めむと欲せば諸の論軌に於て應に善く通達すべく應に他と與に而も諍論を興すべからずというて引用したものであつて、無益な諍論に陥らざらしむるが爲のものである。この十二處の内容から推察すれば、此經中には因明又は論諍論議に關することが説かれて居たのであらう。又（八）は五識は實境を縁じ第六識は實不實の境を所縁とすることを述べたものであつて、細い學說に關係して居る。唯識二十論述記に於て之を見出すが、何れかの他の論に存するものであらう。（九）は成唯識論述記が有解云としての一説に過ぎないから果して此經のものであるかどうか明確ではない。若し此經のものであるとすれば此は第七末那識に關係すといはるるものであるにも拘はらず、實際はさうでない筈である。此經などが第七識別体などを考へて居る理はない。染汚意は單に阿黎耶識の一方面たるに過ぎないものである。第七識別体説は無性の説を繼いで護法が立てた新説たるに過ぎぬ。以上の如くに斷片を見出すが、これのみにて此經の内容全体を明にすることは出来ない。しかしこれだけのみが知られてもともかく大体を彷彿することは不可能ではない。全体として如何なることが説かれて居たにしても、以上の如きものが唯識説などの方面から見ても重要であつたのである。そして此經に攝大乘品なる一品があつたとは、後世いはるるに至つたことながらも達摩笈多譯以前に起つた傳説たることは明であるが若しこれが眞であるとすれば、以上の中（六）までは恐らく其品中にあるものであらうと想像せらるる。勿論六種は如何なる順序をなして居たかは推定の限りでないが、大体かかる順序をなして居たのではなからうか。然し第七は一種異なるものであるから之を含む他の品があつたのではなからうかと考へらるるし、それは論軌品とか因明品とかの名によつて諍論因明の一斑を述べて居たのであらうか。然し果して攝大乘品なる一品があつたか否か確ではないから目下としては六種

は大體同一部分又は同一箇所に存し、第七のみは他部分又は他箇所にあつたであらうと見る外はなからう。

攝大乘論が大乘阿毗達磨經の攝大乘品を釋したものであるとは達摩笈多譯以來玄奘譯を通じていはるるに至つた傳説であつて、眞諦譯の時にはいはれなかつたこと前に指摘した如くであるが、そもそも釋したといふのは如何なる意味であるかを考へて見ねばならぬ。攝大乘論は決して龍樹の大智度論又は世親無性の攝大乘論釋の如くに所釋の本文を隨文的又は逐字的に釋したものでないことは一見何人にも疑ない所であるから、此点については論ずる要はない。然らば大乘阿毗達磨經全体又は其中の攝大乘品の趣意を取つて達意的に論述組織したものであらうか。攝大乘品の存在が不確であるから、經全体の達意的論述と見る方がよいと考へらるるが、若し然りとすれば所釋の大乘阿毗達磨經を指名して引用するのは奇であるし、又他の經論の引用が餘りに多きに失すと思はるるのみならず、數々一義を述べた後に「此中に偈を説く」として擧ぐる偈が他の經や論からの引用であつて、時には之によつて一品全体の説述が構成せられて居ること、入因果勝相品第四の如きを見出す。この偈は大乘莊嚴經論のものであつて、此偈のいふ所で此第四品の殆ど全体が出来て居るのである。然らば此品は直接大乘阿毗達磨經に基いたものでないことを表して居る。またはこれ等の偈に説明解釋を讓つて論文は却つて項目の列擧に過ぎないこと、智差別勝相品第十の中の七明法身功德を説くの部の如きがある。この十七偈と二偈との全部が大乘莊嚴經論のものであつて全く同一順序で引用せられて居るから、これも大乘莊嚴經論に基くものである。或は他書の偈を取つて前後に偈を作り若しくは他偈の趣意を取つて新に偈を作つて完全せしむるもあつて他書に基くことを明にして居る。此の如き点から見ると大乘阿毗達磨經全体の趣意を達意的に論述したともなすを得ないし、況んや其中の攝大乘品一品の趣意を唯單に達意的に述べたとも見做すを得ない。故に結局は大

乘阿毗達磨經の或部の説に基いて一論の綱格を立て以て全体を構成論述したものと考へられる。即ち、攝大乘論全体は應知依止勝相等の十勝相を述べて居るものであるから、此十勝相が大乘阿毗達磨經に列擧せられて居たのを取り、之を論主が他の經論に資料を仰いで縦横に解釋論述したのが釋したといはるる意味に外ならぬと見るのである。攝大乘論各譯の卷首の文を見るに下の如くなつて居る。

佛陀扇多譯

眞諦譯

達摩笈多譯

玄奘譯

(一)攝大乘論即是

阿毗達磨教、及

(一)大乘阿毗曇經

大乘修多羅。佛

(一)阿毗達磨大乘

(一)阿毗達磨大乘

中對_二如來前_一、爲

世尊前、善入_二大

修多羅中婆伽

經中薄伽梵前_レ

欲_レ顯_二發大乘義_一

乘句義_一菩薩摩

婆前善入_二大乘_一

已能善入_二大乘_一

故、善住菩薩說

訶薩、欲_レ顯_二大乘

菩薩、爲_レ顯_二揚

菩薩、爲_レ顯_二大乘

所謂、依_二大乘經_一、

勝功德、依_二大乘

大乘大體_一故說、

體大_一故說、謂依_二

明_三諸佛如來有_二

教_一、說_二如_レ是言_一、

所謂爲_二大乘_一故、

大乘_二諸佛世尊

十種勝妙勝語_一。

諸佛世尊有十勝

諸佛世尊有三十

有_二殊勝殊勝語_一。

相_一所說無等、過_二

種勝相勝語_一。

於餘教_二。

(一)何者爲十。(以下 (二)十勝相者(以下 (二)諸佛世尊有(以 (二)一者(以下十種

十種を列挙す) 十種を列挙す) 下十種を列挙す) を列挙す)

(三)如是、此修多羅 (三)由三此十義勝相 (三)如是等所說修 (三)由三此所說諸佛

句顯發說三大乘 如來所說過三於 多羅句顯三於大 世尊契經諸句

是佛語。 餘教。如此釋三 乘是佛語。 顯三於大乘真是 佛語。

修多羅文句一、顯三

於大乘真是佛說。

(四)云何顯發。如是 (四)復次云何此中 (四)復次、云何顯發。 (四)復次、云何能顯。

此說中小乘經 略釋能顯三大乘 此等所說十處 由三此所說一、十處

不說此十種句 勝三於餘教。今此 聲聞乘中不說 於三聲聞乘二曾不

唯大乘中明。所 略釋顯三斯十義 唯大乘中說故。 見說一、唯大乘中

謂阿黎耶識(以 唯大乘有、小乘 所謂阿黎耶識 處處見說、謂阿

下十種の具体的内 中無一。何等爲十。 (以下十種の具体 賴耶識(以下十

容を舉ぐ) 謂阿黎耶識(以 的内容を舉ぐ) 種の具体的内容

下十種の具体的 内容を舉ぐ)

(五)説ニ如レ是十種句一

(五)如レ此十種處唯

(五)由ニ此等十處二故、

(五)由ニ此所説十處一

非ニ小乗教二故、唯

大乘中有、異於

與ニ聲聞乘一殊異、

顯ニ於大乘異ニ聲

大乘中顯ニ勝説

小乗一、故説第一

殊異者最上故、

聞乘一、又顯ニ最勝一

及勝上二故、是故

佛世尊但爲ニ菩薩

山下世尊爲ニ菩薩一

世尊但爲ニ菩薩一

如來依爲ニ諸菩

薩一説ニ此十義一。

説上、是故言下諸佛

宣説、是故、應レ知

薩一説、以ニ是義二故

故依ニ大乘一諸佛

世尊爲ニ大乘二故

但依ニ大乘一諸佛

依ニ大乘教二故、諸

世尊有ニ十勝相一、

有中十種勝相勝

世尊有ニ十相殊

佛如來說レ有ニ十

所説無等過ニ於

語上、應レ知。

勝殊勞語一。

種勝妙勝語一、應

餘教一。

レ知。

以上の煩雜な對照比較から見ると(一)の中では眞諦譯を用ふれば、(五)に再出せらるる点から見ると、諸佛世尊有十勝相、所説無等過於餘教が經の文句であつて、其他は此文句のある所以の事情を述べた論主の叙事的の地の文である。眞諦譯のみは所説無等過於餘教を有するが今の場合有無は何等他に影響しない。然らばこれが大乘阿毗達磨經に於て菩薩が佛前で言つたとして記されて居る文句であつて、從つて又之によつて(二)に於て省略した十勝相の列名が經の文句なるを知り得る。この点は更に又(三)に於て如此釋修多羅文句というて居ることによつて確めらるる。之を(四)に考へると、十勝相の具体的内容たるものは小乗には説かれなくて而も大乘中の諸所に説かれて居るものであるから、

それ等を適當に組織して十勝相の内容が整頓することが示されて居る。勿論大體の内容は大乗阿毗達磨經に指示せられて居るに相違ない。(五)は以上の總括結語と見られ得る。故に經の文句としては菩薩の言たる諸佛世尊有十勝相所說無等過於餘教、十勝相者(以下十種の名稱)又は之に更に十勝相の具體的內容の摘示の加はつたもののみであつて、其他にはない。即ちかかる十勝相の述べられ居るに基いて論主は廣く他の經論を參照引援して組織的に論述して攝大乘論なる一論を造つたに外ならぬのである。従つて以上の文句が攝大乘品にあるものとすれば、攝大乘論は攝大乘品に基いたもの又はそれを釋したのもといふことを得るが、然し基くといひ釋すといふのは唯單に十勝相の列擧せられて居たのを取つて一論の組織の基として廣く論述したことを指す意味であつて、決して通常いふ註釋とが釋論とかの意味と同一ではない。然し攝大乘品の存在が怪しいとすれば、唯大乘阿毗達磨經の或部にあつたとなす外はない。此の如く解釋する外はないとすれば、これ全く前に引用した古逸部の攝大乘論章卷第一の説と同一となるものであつて、この論章の説の穩當なるを認め得るのである。又無性譯に於ては攝大乘論卷尾の附言は前に引用した玄奘譯と同一に之を有し、攝大乘品我阿僧伽略釋究竟を明示するにも拘らず、前に大乘法苑義林章總料簡章の引用文中括弧に入れた如く、是故說此名攝大乘盡其所有大乘綱要無別說故とのみ解釋して、此外には何等攝大乘品の略釋なることを認めて居らぬ。故に無性も亦大乘阿毗達磨經中の十勝相に基いて縱横に論述し以て大乘要義を總攝し盡すから攝大乘論と名づけたものであるとなす説である。

然るに眞諦譯のみは、前引用の卷首の文の比較對照によつて知らるる如く、一種特別であつて、文面には何等大乘阿毗達磨經に十勝相が記されて居ることを示すものがない。然らば一般大乘にて説かるる十勝相に基くかの如くであるが、

實際としては必ずしもさうではあるまい。世親釋の文を見るに

(眞)若離_レ阿毗達磨名_一則不_レ知_二此論是聖教_一、爲_二此義_一故。又爲_レ顯_二經名_一、譬如_二十地經_一。……………此

復次、此論說_二阿毗達磨大乘修多羅_一者、欲_下顯_二如來法門別類_一、及顯_中此論別名_上。

(達)若離_レ阿毗達磨言_一、則不_レ知_二是何說_一、爲_二此義_一故。又是出_二經名_一、如_レ言_二十地經_一。……………

言_二阿毗達磨修多羅_一者、彼修多羅中、明_二此阿毗達磨法門_一故、亦爲_レ顯_二修多羅名_一故。

(玄)若離_レ舉_二阿毗達磨大乘經言_一、則不_レ了_二知論是聖教_一、爲_二此義_一故。又爲_レ顯_二經名_一、如_レ言_二十地經_一。故

說_二如是阿毗達磨大乘經言_一、……………

爲_レ顯_二法門別名_一故、舉_二阿毗達磨_一。爲_レ顯_二通名_一故、舉_二經言_一。

とあつて眞諦譯も他二譯と異らざること、従つて大乘阿毗達磨經の中に十勝相のことが記されて居ることを意味するところが知らるる。唯眞諦譯は論本文を此釋に従つて譯したから他譯と異なるに至つたのみである。然らば又眞諦譯の巻首の

攝大乘論即是阿毗達磨教及大乘修多羅

を何と訓讀すべきかが問題となる。此中、攝大乘論即是阿毗達磨教は明に右引用の釋論の第一行前半の意味と第二行前半の意味とによつて居るものであつて、此論が聖教であり又如來の法門の別類たる阿毗達磨を述ぶるものなることを表はすものである。他二譯には此本文は缺けて居るから、元來の原本には無かつたものであるかも知れぬが、然しかならずことによつて世親譯の意味する所が現はるのであるし、論主無着もかかる趣意を有したとなさむとするのである。故にこれは通常の如くに、攝大乘論は即ち是れ阿毗達磨教なりと讀むで差支ない理である。次の及大乘修多羅は第一行

の後半と第二行の後半との意味によつて居るものであるから、具にいへば、及阿毗達磨大乘修多羅となつて經名を示すものと見るべきであり、而もこれが其まま此論の別名を示すとせらるるのである。故に、及び大乘修多羅なりと讀むで差支ないことになる。勿論かく讀めば、攝大乘論は阿毗達磨大乘修多羅なりとなり、論が經であるとなつて甚だ奇である。恐らくこの奇なる点に鑑みて達摩笈多譯は亦爲顯修多羅名故となしたのであらうが、玄奘譯は爲顯通名故となして論が經と共通の名を有するものなることを表して居る。故に、たとひ奇であつても、玄奘譯の支持をも得るから、大乘修多羅なりと讀むべきである。この点から更に眞諦譯の卷尾の附言たる阿毗達磨大乘藏經中名攝大乘此正說究竟の中の攝大乘は此論の名を出したもので、攝大乘と名づくる此論の正說が終つたといふ意味と解せらるるのである。

以上攝大乘論と大乘阿毗達磨經との關係は通常の能釋所釋の關係と見らるべきでなくして、後者の中に簡潔に記さるる十勝相を基として一論の結構を立て以て廣く他の經論を資料として用ひて大乘一般の要義を概論せるものと認むべきで、恰も究竟一乘實性論が陀羅尼自在王菩薩經に説く佛と法と僧と性と菩薩と功德と業との七句によつて全体の結構を立て、他の諸經を用ひて廣く解釋論述したと同様なるものであり、而も大乘阿毗達磨經を引用する六箇所が攝大乘論の學說上礎石的のものとなつて居るから、攝大乘論の學說の根柢もこの經に存すともいへるものである。かくこの論とこの經との關係を考察することは重要な意味を有するものなることが知らるる。

最後に一つ論述すべきは大乘阿毗達磨集論についてである。論の最後に
何故此論名爲大乘阿毗達磨集。略有三三義、謂等所集故、遍所集故、正所集故。

とあるが、此中の第二を雜集論には

遍所集者、謂遍攝一切大乘阿毗達磨經中諸思擇處一故。

と解釋して居る。然るに慈恩の雜集論述記卷一に之を引用して

師子覺言、由能遍攝大乘阿毗達磨經中諸思擇處、名遍所集。

といひ、更に略にして廣を攝し聚にして散を攝し唯彼に依るのみとの三義によつて解釋するが、引用文に於て最も重要な一切を省略したが爲めに、大乘阿毗達磨經なる一經の所説の思擇的のものを集めた意味となしたのである。之によつて爾來此經と大乘阿毗達磨集論との關係が此の如く見做さるることになり、従つて又此論と攝大乘論との關係も考察せらるるに至るが、然し一切の大乘阿毗達磨經中の思擇處を集めたもので特定の一經の所説を集めた意味ではないから、此論と攝大乘論との直接の關係を考慮する必要はない理である。故にこの点には問題となつて來ないが、この一切の大乘阿毗達磨經とは何を指すか。一般には大乘阿毗達磨經と稱せらるる、若しくは嚴密には、しか見做さるる、經が存することを指す意味と解せらるる。然し實際としては此名を通名とし更に別名を加へて名となした多數の經があつたのではないから、大乘の阿毗達磨的のことを内容となす經を指すと解する外はない。即ち前に指摘せる無上依經解深密經佛地經等の如き性質の經をいふのである。故に之によつてもかかる經を論經となす説も決して根據のない獨斷ではないことを確め得る。